

輪具古墳群

輪具古墳群は、雄国山麓開拓事業によって昭和五十一年に発見された古墳である。

古墳は二基あり、一号墳は直径八メートルの円墳で、内部はへん平な山石を数段積んだ長さ二・四メートル、幅〇・七メートルの縦穴式石室で、鉄斧一点、耳環一对、管玉九点、ガラス製小玉八点が出土した。二号墳は、一号墳の北方約三〇メートルの所にあり、墳丘前面を河原石で葺いた直径九メートル、高さ一メートルの円墳である。内部構造は不明であるが、内部から宋銭である「大観通宝」などの古銭が出土した。

一号墳がつけられた時期は、七世紀初めの頃と考えられる。

二号墳は、いわゆる古墳時代につくられた古墳とは様相が異なり、塚的な性格が強く感じられる。築造された時期は、一世紀後半以降であろう。なお、一号墳の内部主体である竪穴式石室は、近くの権現森公園に移築復元されている。

所在地 熊倉町都 権現森公園



灰塚山古墳

新宮城の西にある小高い丘で、「小山」といわれていた所であり新編会津風土記に「村より亥の方（北北西）六町余（約六五〇メートル）にあり、昔の墓所なり」と記されている。

調査によって、灰塚山は前方後円墳であることが確認された。古墳の規模は、全長六一・二メートル、後円部の直径は三三・二メートル、高さは五メートルあり、前方部の長さは二七・六メートル、高さは四メートル、幅は二三メートルである。

また灰塚山の東新宮城の外堀あたりには、古い時代の墓所があったことも伝えられている。

所在地 慶徳町新宮

